

「あの日」の体験集めて忘れない

3月11日、高校2年のCさんが校内放送をさせて欲しいと訪ねてきました。年度の授業は終了しているとはいえ、会議や補習授業が行われていることもあって、余程の必要性がなければ生徒の放送はできません。

いったい何を放送したいの？と聞いてみたところ、登校している全校生徒に、東日本大震災の犠牲者に対して黙禱を呼びかけたいとのことでした。入学する前に通っていたフリースクールでは、震災前から東北と交流があり、震災後は毎年被災地にボランティア活動に出かけていたのだそうです。

同じ高2のKさんは、家族が教会の関係で支援に関わっていたそうです。一方、富山県出身のD君は、直接的な体験はなく、「公共広告」を流すACジャパ

「311の会」

はぐくむ

ンのコマースシャルの記憶しかない「超無関心層」だったと言います。高校に入ってから関心を持ち始め、この夏休みには東北に1カ月滞在して現地を見してきました。

彼らが中心になり、震災の問題を考えようと「311の会」が結成されました。夏休みにそれぞれが行ってきた被災地の報告をし合うと同時に、在校生と教職員に「あの日、あの時何をしていましたか？」というアンケートをして、回答を集めました。

アンケートには、3年前のそれぞれの体験がづらられていました。授業中だった人、卒業式だった人、学級閉鎖で自宅に1人でいた人、電車の中や「先生のお説教のまっ最中」という人も。強い揺れに路上で座り込んでしまった、靴を履かずに靴下のまま校庭に走ったという経験

も書かれていました。帰宅できずに学校に泊まった生徒もいました。その時の戸惑いや驚き、恐怖がつつられ、1枚1枚読んでみると、生々しくあの日のごがよみがえってきます。

最近も御嶽山の噴火や土砂崩れ災害などが報道されていますが、やはり自分の足元ではない感覚が残ります。それに比べて、東日本大震災はほとんどの生徒が何らかの体験や関わりをもっています。改めて、これほどの出来事は戦後無かつたのでは、と思いました。

311の会のメンバーは今、学園祭に向けて展示の準備をしています。アンケートの回答を張り出し、自分の関わっているボランティア活動の紹介を展示します。いずれも、次第に風化しつつある震災の問題を忘れてはいけないという強い思いが感じられました。誰に言われるでもなく、主体的に震災からの復興に関わっていく高校生の姿は頼もしく感じられます。(自由の森学園理事長 鬼沢真之)